

## 沖縄の離島における無資格者による分娩介助に関する調査

玉城 清子\* 賀数いづみ\* 古謝タカ子\*  
 仲里 幸子\* 高屋 澄子<sup>2\*</sup> 大嶺千枝子<sup>3\*</sup>  
 中村 安秀<sup>4\*</sup>

沖縄県は広大な海域に散在し、沖縄本島、宮古島、石垣島の主要島を中心に70余の島々から成り立っている。宮古島は沖縄本島より330 km 離れ、伊良部村は宮古島よりさらに7 km 離れた離島である。昭和30～45年の宮古保健所では無資格者による分娩介助が高い割合を占めていたが、その管内でも伊良部村は高率を示していた。昭和30～45年までの間に伊良部村に居住し、当時妊娠分娩の可能年齢にあったと思われる昭和6年～15年生まれ的女性143人を無作為に抽出し、面接調査を行うことができた。うち104人に対して無効回答6人を除く98人の372例の分娩を今回分析の対象とした。主な知見はつぎの通りである。

1. 伊良部村における372例の分娩のうち、無資格分娩助産者による分娩は306例(82.3%)であった。無資格分娩助産者は経験を積んだ取り上げ婆さん(Traditional Birth Attendant. 以下TBAという)のみでなく、隣近所の婦人や実母、親族など妊産婦を取り巻く身近な人々であった。
2. 妊産婦の多くは医療機関が遠いことや経済的理由より、無資格者に分娩介助されるのが当然であると考えていた。
3. 新生児の異常に関しては有資格者による分娩介助では死亡がみられなかったのに対して、無資格者による介助では22例の新生児死亡があった。無資格者による分娩介助のうちで、臍帯切断器具を消毒していた場合に臍の異常は明らかに減少していた。

**Key words** : 母子保健, 分娩介助, 無資格者, 沖縄, 調査

### I はじめに

沖縄県は、わが国最南端に位置し、東西約1,000 km、南北400 kmにおよぶ広大な海域に散在し、沖縄本島、宮古島、石垣島の主要島を中心に70余の島々からなっている。そのうち、有人離島は40で、県人口の約12%が離島で生活している。伊良部町は沖縄本島から南へ約330 kmの宮古諸島の中にあり、伊良部島と下地島の2島からなり、宮古平良市から7.8 kmの位置にある(図1)。昭和57年に町制が施行され伊良部町となったが、本研究は町制施行前に関する調査であり、以後、伊良部村と表す。

昭和40年の伊良部村の人口は約1万人であった。病院や産婦人科診療所のある宮古島までの交

通手段は片道1時間、1日1便の船しかなく、天候状態が悪いと欠航するという不便な交通事情であった。昭和43年より1日5～6便に増便され、宮古島への交通が便利になった。

伊良部村では昭和27年に駐在公衆衛生看護制度が実施され、公衆衛生看護婦が看護活動をはじめ、昭和36年より村委託として助産婦が活動をはじめ、また、同年には島の北と南の2ヶ所に診療所が開設され、北には本土からの派遣医、南には村医が勤務していた。

沖縄県における分娩立ち会い者の統計では、医師、助産婦、「その他」に分類されている。「その他」の者は正規の免許をもっていない、いわゆる無資格分娩助産者に相当する。宮古保健所管内では「その他」の立ち会いによる分娩は昭和35年には86.5%にのぼっていた。昭和45年には、宮古保健所管内全体では「その他」の立ち会い分娩は23.6%に減少したが、伊良部村では依然40.0%と効率を示していた。昭和45年以前の伊良部村における分娩立ち会い者別の統計はなかったが、昭和30～45年当時は「その他」の立ち会いによる分娩

\* 沖縄県立沖縄看護学校

<sup>2\*</sup> 沖縄県立北部病院

<sup>3\*</sup> 沖縄県環境保健部医務課

<sup>4\*</sup> 東京大学医学部

連絡先: 〒902 那覇市与儀 1-24-1  
 沖縄県立沖縄看護学校 玉城清子

図1 伊良部島の位置

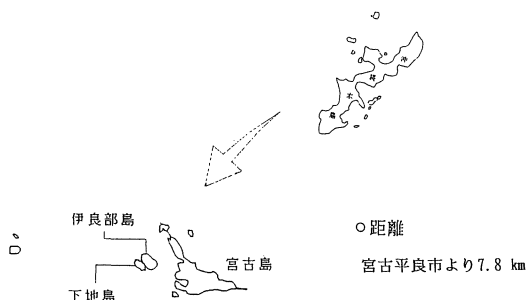


表1 分娩した地域

分娩した地域		人数	%
伊良部村内		372	90.5
島外		39	9.5
内 訳	沖縄本島	14	3.4
	宮古	20	4.9
	八重山	3	0.7
	その他*	2	0.5
計		411	100

\* 船の上

が中心だったと考えられる。

沖縄県離島における無資格分娩介助者に関する事例報告はあるが<sup>2,3)</sup>まとまった調査研究は今までほとんど行われていなかった<sup>4)</sup>。本研究では昭和35~45年当時の伊良部村における無資格分娩介助者に注目し、無資格分娩介助者による分娩の母児に及ぼした影響を明らかにすることを目的に調査を行った。

## II 調査対象および方法

調査対象者は、昭和30~45年までの間に伊良部村に居住し、当時妊娠分娩の可能な年齢にあったと思われる昭和6年~15年生まれの女性を対象とした。対象の選定の手続きについては公文書で役場に依頼して、住民票より対象者を把握し、各地区ごとに3分の1ずつ合計143人を無作為に抽出した。平成3年7月に沖縄県立沖縄看護学校の教職員と学生が26項目にわたるアンケート票により直接聞き取り調査を行った。104人に面接調査を実施、39人は旅行や仕事で不在のため面接できなかった。調査を実施した104人中、出産経験がない、精神障害で調査できないなどを除いた98人から有効回答を得た(有効回答率68.5%)。有効回答であった98人の昭和30~45年における分娩数は411例で、そのうち372例(90.5%)が伊良部村内での出産、39例(9.5%)が村外の出産であった(表1)。伊良部村内で出産した372例を今回の調査分析の対象とした。

## III 結 果

### 1. 分娩介助者

伊良部村内での分娩372例のうち、無資格分娩介助者による分娩が306例(82.3%)と多く、有

表2 分娩介助者の資格の有無と児の異常の状況

児の状況	無資格分娩介助者	有資格者	計
異常なし (%)	283 (92.5%)	65 (98.5%)	348
異常あり死亡 (%)	23 (7.5%)	1 (1.5%)	24
計 (%)	306 (100%)	66 (100%)	372

資格者(医師、助産婦)によるものは66例(17.7%)と少なかった(表2)。

### 2. 分娩場所

分娩場所は371例が自宅分娩であり、1例のみが助産婦宅の出産であった。自宅分娩をした人の産室は、裏座(自分の部屋)が51%、土間・台所が31%、座敷が18%であった。

### 3. 無資格分娩介助者の内訳

無資格分娩介助者による出産306例のうち、部落内に居住し比較的分娩介助経験のある取り上げ婆さんが71例(23.2%)、近隣の人70例(22.9%)、実母58例(19.0%)、親族59例(19.3%)であり、なかには産婦一人で分娩したというの34例(11%)あった(図2)。

### 4. 無資格分娩介助者による介助の理由

無資格分娩介助者に分娩介助してもらったことのある人は98人中87人(88.8%)であった。無資格分娩介助者に介助してもらった理由(複数回答)は、医療機関が遠い41人(47.1%)、無資格分娩介助者を信頼していた38人(43.7%)、無資格分娩介助者に介助されるのが当たり前だと思っていた37人(42.5%)となっており、経済的理由はわずか20人(23.0%)であった(図3)。また、

図 2 無資格分娩介助者の内訳 (n=306)

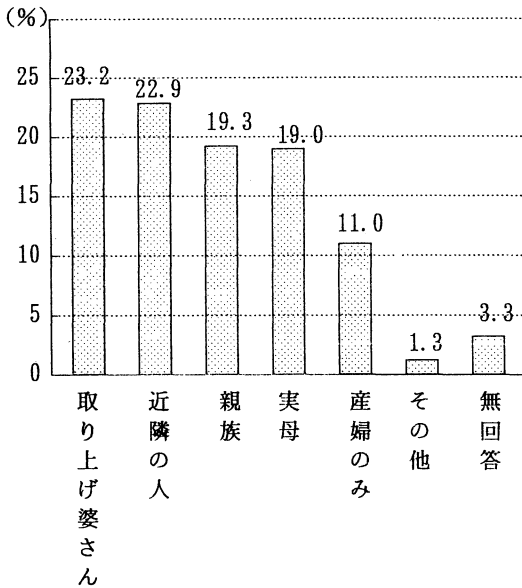


図 4 無資格分娩介助者に介助されたときの気持ち (n=87人)

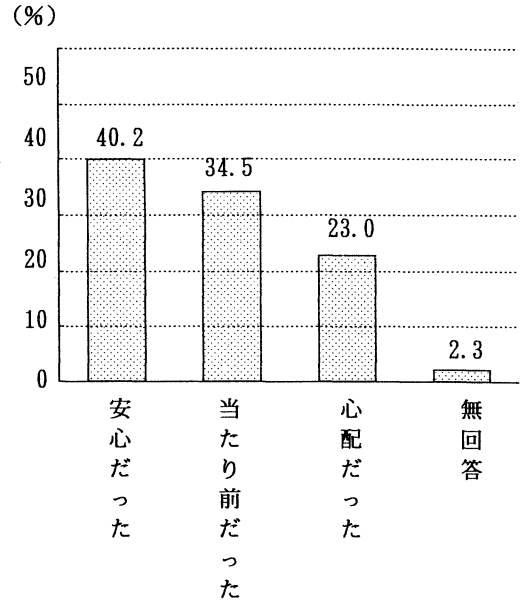


図 3 無資格分娩介助者に介助してもらった理由 (n=87人複数回答)

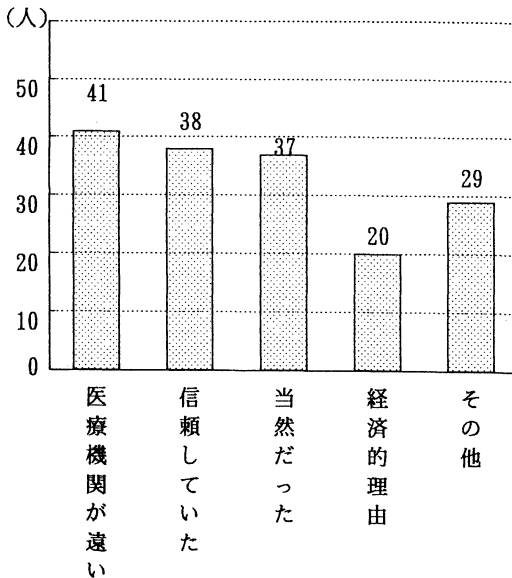


表 3 分娩介助者別の臍帯の状態

介助者 児の状況	無資格分 娩介助者	有資格者	計
異常なし (%)	287 (93.8%)	62 (94.3%)	349
異常あり (%)	16 (5.2%)	3 (4.5%)	19
無回答 (%)	3 (1.0%)	1 (1.5%)	4
計 (%)	306 (100%)	66 (100%)	372

新生児期の健康状態は、有資格者による分娩66例中65例(98.5%)が健康で新生児死亡がなかったのに対し無資格分娩介助者では306例中283例(92.5%)が健康、異常が1例、死亡22例であった(表2)。

2) 臍の状態

臍の状態について資格の有無別に検討すると、無資格分娩介助者による分娩介助306例中16例(5.2%)に臍の異常があった。異常の内容としては、破傷風6例、臍湿潤、化膿、発赤が10例であった。有資格者の分娩介助66例中、臍の異常ありは3例(4.5%)であった(表3)。異常の内容としては臍の湿潤1例、化膿1例、発赤1例であ

無資格者に介助されたときの気持は、安心だった35人(40.2%)、当たり前だと思っていた30人(34.5%)、心配だった20人(23.0%)であり、不安を持つ者は少なかった(図4)。

5. 無資格分娩介助者が児の健康に及ぼした影響

1) 新生児期の状況

表4 臍帯切断器具の消毒法と臍の状態

(無資格分娩介助者のみ)

消毒法 臍の状態	煮沸・火で あぶる	その他の 消毒法	酒・水海水	消毒しない	覚えてない	計
異常なし (%)	91 (100%)	14 (100%)	46 (86.8%)	104 (92.9%)	32 (97.0%)	287 (94.7%)
異常あり (%)	0	0	7 (13.2%)	8 (7.1%)	1 (3.0%)	16 (5.3%)
計 (%)	91 (100%)	14 (100%)	53 (100%)	112 (100%)	33 (100%)	303 (100%)

た。

### 3) 臍帯切断器具の消毒と臍の異常

無資格分娩介助者による分娩介助306例中、早期新生児死亡例を除いた303例について臍帯切断器具の消毒方法と臍の異常の関連を検討した。切断器具を煮沸や火であぶるあるいは他の方法で消毒したものを使用した場合には、全例に臍の異常は見られなかった。しかし、酒・水・海水による器具の洗浄を行った場合には53例中7例(13.2%)、全く消毒をしなかった場合には112例中8例(7.1%)に臍の異常が発生していた(表4)。

## IV 考 察

昭和30～45年に伊良部村に在住して分娩した対象者98人の分娩数は411例で、その91%にあたる372例が村内での分娩であった。伊良部村内での分娩の82.3%は無資格分娩介助者による分娩であり、消毒方法の不十分さによる臍の異常や新生児期の死亡が多く認められた。当時の平均的な家屋構造は木造平屋建てで、南側の日当たりの良いところに座敷と仏間があり、裏のほうに若い夫婦の寝室(裏座)があり、下座に土間や台所があった。自宅での分娩場所の多くは薄暗い裏座や不潔な土間・台所であった。

当時の伊良部村の人々が無資格分娩介助者に分娩介助を頼らざるを得なかった理由を考察すると、交通の不便さや経済的理由が主な要因と推測したが実際に調査してみるとさらに別の要因が把握できた。すなわち無資格分娩介助者を信頼

し、無資格分娩介助者に介助されるのが当たり前とする考え方であった。面接調査のなかでお産は自然なことであり、排便のようにいきんで出せばよいという話を聞くことができた。当時一般的に、お産は女性のだれもが行う生理的なもの、自然なものであり、特別な異常がなければわざわざ有資格者に依頼するほどのことではないと認識していたように思われた。

伊良部村では分娩介助経験のある取り上げ婆さん以外に隣近所の人や実母、親戚の人など、分娩介助経験の少ない身近な人達によって介助されていたのが特徴であった。

専門的知識に乏しい無資格者に介助されることに対して不安が大きかったのではないかと推測したが、無資格者に介助されて心配だったと答えたのはわずか20%であり、当たり前だと思いつても感じなかった、あるいは安心だったという回答が多かった。このことは、無資格者に介助されるのが当然であるという当時の社会風潮<sup>9)</sup>と関連していると思われる。

本研究は、調査対象期間後20年以上経過した時点での振り返り調査であり、この間に伊良部村を離れた人については調査することができなかった。また、妊娠出産などによる母の死亡例は調査の対象とすることが不可能であった。しかし、伊良部村で出産し、現在も村内に住んでいる女性の調査時年齢は50～60歳であり、有効回答した人については意識も明瞭であり、忘れた事項については回答なしに分類することにより、かなりの程度まであいまいさを排除できたと思われる。

(受稿 1993. 8. 4)

## 文 献

- 1) 琉球政府厚生局公衆衛生部予防課編. 母子衛生の主なる統計 (昭和39年~45年). 那覇, 1964-1970.
  - 2) 華表宏有. 沖縄県多良間島の医療事情と分娩介助者. 助産婦雑誌 1976; 30: 388-394.
  - 3) 華表宏有. 沖縄県離島における無資格分娩介助者. 助産婦雑誌 1977; 31: 144-153.
  - 4) 伊良部智恵子, 他. 宮古における母子衛生の実状. 18回公衆衛生看護研究発表会集録 (琉球政府厚生局). 那覇: 1969; 5-9.
  - 5) 安次嶺 馨. 沖縄の子どもたち. 那覇: ひるぎ社, 1984.
-